

『停電の夜にしたことぜんぶ』

著：八条ことこ

ill：カワイチハル

「酔いは醒めてきたみたいだね」

穏やかな声だ。

「……すみません。急に。僕、酒癖悪いのかも」

絡み酒ってやつだ、これ。猛烈に恥ずかしくなってきた。

「いや。構わないよ。似たような後悔をしたから、俺は向井さんの手伝いをしたかったんだし。生きてる間にできなかったことがあると、引きずるよなあ」

大学生活を送りながら、近所の老人の暮らしをサポートする——そんなこと、僕にはできない。思いつきもしないだろう。

「……ありがとうございます。本当に」

すごい。

込み上げる感謝の気持ちに追いつく言葉が見つけれない。

「もしかして泣いてる？」

「そこまで感動屋じゃないです」

感情の昂（たか）ぶりを見抜かれて、慌てて否定してしまった。

自分でも、泣いていないのが不思議なくらい涙腺がちくちく痛いけど、サークルの飲み会でこれは恥ずかしい。

ぷっと榎本さんが嘔き出した。

「目がうるうるしてるじゃん」

「そんなこと！」

「ほら泣けよ、泣いちゃえよ」

肩を抱きながら揺すられて、つられてゲラゲラ笑ってしまう。彼と触れているところが熱い。

いかにも男同士って感じの雑な触れ方なのに、優しく抱きしめられているみたいだ。

——離れたくない。ずっと、このままで。

湧き上がってきた感情の正体が、じわじわと意味を伴って掴めてきた。

「榎本さん」

衝動的に、名前を呼んだ。

本当は、拓真さん、と口にしていた。他のサークルメンバーにそう呼ばれているのを聞いたから。

彼はどの人とも親しそうで、頼まれごとを次から次に引き受けていた。設置から火の管理までを長い時間やっていたし、買い出しの内容も把握していて指示が早く、サークルの後輩を可愛がっているのが伝わってくる和（わ）気（き）藹（あい）々（あい）とした雰囲気だった。

場に溶け込んでいるときの榎本さんは、誰にとっても身近な先輩で友人で、もしかしたら博愛主義者に近いのかもなと感じさせる。

人を疎む態度が、驚くほど見当たらないんだ。億（おっ）劫（くう）そうにする姿すら、疲れていそうなどきでも見せない。

「なに？ ああ、分かった。トイレはあっち。見えないかな」

彼の指さす方向に、レンガ造りの公衆トイレと洗い場がある。

「あ——ありがとうございます」

急いで立ち上がった。待ちきれないふうを装って。

そうでもしなければ、今、言ってしまいそうだから。

——離れたくない。

一緒にいたい。

体の奥底から力が漲（みなぎ）るような、充実感に満たされている。

信じられないくらい明るい気分だ。

向かうところ敵なし。大袈裟じゃなくてそう思う。

短い会話の間に、肩の荷を下ろしてくれた榎本さんは、誰にでも優しいのだろうけど、特別な人に思えてならなかった。

それにしても——、と考える。

榎本さんの後悔は、どんなものだったのだろう。やっぱり親戚絡みなのかな。今度じっくり聞いてみたい。

彼が何を感じ、どう考える人間なのか、表層から汲（く）み取れない部分を知りたい。

ひどく胸が温かく、さっきまでとは別の意味で頬が火照っている。
ここでの生活の中で、榎本さんと過ごす時間が終わるのが、もっとも名残惜しかった。
不思議だな。長年の付き合いのある地元の友達にも言えないことが、榎本さんには素直に言える。

トイレから戻ると、バーベキュー場は終盤ムードに移行していた。
間もなく八時半なので、一旦ここで締めるらしい。
榎本さんの姿を探したけど、さっきの場所には見当たらなかった。
—どこだろ？

一緒に帰りたいんだけどな。
きょろきょろ探し回っていると、ゴミを回収して回っている、ひときわ長身の彼が見つかった。
ゴミ袋を持って、二年生の女の子とペアを組んで歓談しながら片付けている。
必要以上にくっついてるように見えて、じわりと不快感が芽生えた。

「ああ、向井くん。もう大丈夫になった？」
急に声をかけられて振り向くと、中村さんが横に立っていた。
「はい。もう大丈夫です」

「無理に飲まされたんだろ？ ごめんな。酒癖悪い奴がいて。一年にはやるなって言ってたんだけど、聞かなくて。困っただろ」

「いえ。榎本さんが酔い醒ましに付き合ってくれたので」
「拓真の紹介だったよね。入学前から知り合いなんだって？」
「はい。祖父と親しくしていただいていたので、その縁で」
「そっか。あいつ面倒見いいもんなあ」
「そうですね」

「しかもモテる。モテすぎ。どうなってるのかね。この前別れたとか言ってたくせに、もう彼女できてるんだもんない」

「……え？」
煮えたぎっていた血液がずっと冷却されるのが分かる。
頬の火照りが今や白々しい。

「ほら、今一緒に片付けしてる子。二年の高田っていうんだけど、昨日から付き合ってるんだってさ。向井くん、まだ聞いてない？」

「はい。……そういうことは、あんまり話さないから。—昨日からですか」

「そっか。—いいよなあ、顔のいい奴は。次から次に彼女替えてもがっついてるって言われたいし。全部言い寄られて付き合ってるらしいから羨ましい話だよ。すぐダメになるって言われても、俺たちには分からない苦労だね」

悪（あ）しざまに言われている、と引っかかるものを感じたけど、僕の口を介したら、もっとひどい言葉が出てくるだろう。

やっぱり次から次に寝てるんだ。

榎本さんはその辺のことを濁していたけど、傍証としては間隔が短いというのが妥当な判断と言えるだろう。だってふられて一週間で別の女の子とくっついたんだから。

「……そうですね」

榎本さんはノンケで、彼女がいて、僕との間に何かが起こるような隙（すき）は元からない。分かっているのに、心臓が軋みを上げている。

くそ。

痛いよ。

できれば言葉にしたくなかった、—きっとそうだと予感していても、意識したくはなかったけれど、僕は榎本さんが好きだ。

悪く思いたくない。

でも、二日前の晩に、榎本さんは言っていた。

—責任を取らなきゃいけないって。

取らなくていい。今すぐやめてしまえばいい。

よりによって、僕の家から起き出した日のうちに付き合い始めたなんて話を聞きたくはなかった。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>